

* 上田創造館の世界天文年2009企画展示

アーカイブ室新聞218号に上田市にある財団法人上田市地域振興事業団「上田創造館」の世界天文年2009の公認イベント、企画展示「望遠鏡が拓いた宇宙400年展」(8月1日～8月26日)(写真1)に国立天文台天文情報センター・アーカイブ室所蔵の17点を貸出したという記事を書いた。上田創造館では、7月31日深夜まで作業を行い8月1日の展示公開に間に合わせ、その展示の様子をお送りいただいた。大きな会場に「すばる」の主鏡の直径8.2mのアルミシートが張られ、それを取り巻くように「すばる」の1/100模型、リーフラー時計、ソ連製のAFUカメラなどが配置され、左一面のガラスケースの中には、国友一貫斎(藤兵衛)が作った60mmグレゴリー式反射望遠鏡、アーカイブ室から貸し出した天文時計類、経緯儀、子午儀など多彩な展示(写真2)が行われている。



写真1 「望遠鏡が拓いた宇宙400年展」の看板

上田市立博物館は、日本で初めて制作された国友の反射望遠鏡が所蔵されていることで有名である。「望遠鏡が拓いた宇宙400年展」の目玉はこの国友藤兵衛の望遠鏡であろう。この企画展示のため、上田市博物館から借出され展示されている。国友藤兵衛の望遠鏡は、非常に精度の高い望遠鏡で、藤兵衛は天保3年(1832年)頃からグレゴリー式反射望遠鏡を製作し始め、当時の日本で作られていた屈折望遠鏡よりも優れた口径60mm、60倍の倍率のグレゴリー型の反射望遠鏡を製作した。この望遠鏡は、後に天保の大飢饉等の天災で疲弊した住人のために大名家等に売却されたと言われ、その1台は高島藩諏訪氏9代城主が購入し、その後、幕末の頃、現在の松本市深志に住んでいた等々力氏がわたり、戦後上田市に

寄贈され、現在は上田市立博物館に所蔵されている。国友藤兵衛の望遠鏡は4台が現存しており、保存状態のいい物は160年以上経ても金属鏡が曇らず、今でも木星の縞や土星の輪が確認できるという。また、国友藤兵衛は自作の望遠鏡で天保6年（1835年）に太陽黒点観測をかなり長期に亘って行い、他にも月や土星、その衛星のスケッチなども残しているともいわれており、日本の天文学者のさきがけの一人として知られている。



写真2 国友藤兵衛の望遠鏡の展示など

写真3には、右手にリーフラー時計、左手ガラス室展示にルビジュウム原子時計、セシウム原子時計、クロノメーターなどの時計類、流星写真儀などの展示が見える。



写真3 手前のアルミシートがすばる主鏡を模したもの

写真4はすばるの1/100模型である。



写真4 すばる1/100模型と解説

その他、アーカイブ室から貸出した30mmバンベルヒ経緯儀、27cm一等経緯儀、玉屋経緯儀、70mmバンベルヒ子午儀などの展示がある（写真5）。



写真5 経緯儀、子午儀などの展示

この企画展示の目玉は、国友藤兵衛の望遠鏡だと書いたが、もう1点大きな目玉である大変な作業で展示した大物がある。通常では貸し出しは考えられないものを、上田創造館館長・渡辺氏の熱意を汲んで貸し出したものが、堂平観測所に置かれていたソ連製のAFUカメラ（人工衛星追跡望遠鏡：写真6）である。



写真6 展示されているソ連製AFUカメラ